

# 夏衍と蔡淑馨

## ——1923年～1925年を中心に——

板 谷 俊 生  
(外国語学部 中国学科)

### キーワード

夏衍 蔡淑馨 杭州 日本留学

### はじめに

中国人留学生の夏衍は大正時代に中国浙江省杭州から北九州戸畑の明治専門学校に留学してきた人物である。

夏衍の日本北九州留学時代については夏衍の回顧録『懶尋旧夢録』に詳しい。しかし、抜け落ちている部分が相当数あると思われる。故意に削除した部分というべきかも知れない。明治専門学校に留学していた多くの中国人留学生のことや恋愛事情については発表を差し控えたのではないかとも思われるふしがある。

本論文では、北九州留学時代の夏衍、特に彼の恋愛事情について調査し、夏衍の回顧録『懶尋旧夢録』の空白部分を少しなりとも埋めていく作業を行ってみたい。

### 第1章 夏衍の人生の転換点

#### 第1節 1923年「多事の秋」

夏衍にとって、1923年夏休みの帰省は人生の転換点であり、「多事の秋」であった。ひとつは初めて一人で旅行し、彼の人生観が大きく変わり始めたことである。もう一つは人生初の大きな失恋をしたことである。

まず、初めての一人旅行について、夏衍の回顧録『懶尋旧夢録』をみてみよう。

夏衍は1923年の夏休みを利用して、朝鮮を経由し、東北、華北を一人旅した。そのころ留学生には3年毎に80円～100円の見学旅行費が支給された。人生で初めて大金を手にした彼は有頂天になり、7月、下関から連絡船に乗り釜山へ渡り、トランク片手に漢城、平壤を巡り、約

10日間朝鮮を旅行した。その後、奉天（瀋陽）に2日間滞在し、さらに北上してハルビンに行く。ハルビンに3日間滞在したあと、北京の李姓の表兄のところに厄介になり、万里の長城を見物するなど毎日のように名所旧跡を訪ね歩いた。そして1週間後北京を離れ、杭州に帰省した。その8月上旬の蒸し暑い午後、杭州城駅から徒歩で実家のある嚴家街に戻ると、口をきく気力もないほど疲労困憊してしまった。母と長兄からは、なぜ手紙1本寄こさなかったのか、今じゃお袋のことは眼中にないのか、一人で大きくなったと思っているのか、外国留学できたのもお前一人の力だと思っているのか等々、さんざんお小言を頂戴する始末であった。<sup>1</sup>

夏衍は当時を振り返って、つぎのように回想する。

「この夏休み、わたしにとってどうやら“多事の秋”でした。……（略）……釜山で、漢城で見てしまった朝鮮人の——子どもや女性を含めての声無き敵意、奉天の駅頭で聞いてしまった`満鉄、の線路警戒巡査の中国人苦力に向けられた凶暴な怒鳴り声、北京の街角で見かけたこの品もの売りますの枯草の標識を挿して子女を売る醜い状況、……わたしの心はいつまで経っても平静ではいられませんでした。科学技術の修得もたしかに必要でしょうが、でももう二度と、安定した心境で外国小説を読み、`肩の凝らない本、を読むことはできませんでした。」<sup>2</sup>

また、夏衍の『聖誕之夜』には、夏衍の日本留学のきっかけとなったある場面の描写がある。

私は忘れることができない。学校の施設のために、一度も私と反対の立場に立たないことはなく、私たちから世にも稀な暴君と見なされた校長が、去年亡くなった門番の魯昇に私を呼んで来させたときのことを。

「君は卒業後どうするつもりだ？」校長は尋ねた。彼の鋭い眼の光が私の心を射抜いた。

「……」虎の目の前の子羊のように、ただ震えていた。

「仮に君がここで学業をやめても、私は君のために職を探してあげるが、しかしそれは君のために惜しいことだと思う。」校長は少し励ますような口調であとを続けた。

「つまり、君は自分の道を誤ってはいけないということだ。もし君に進学する意思があるなら、学校から君の経済面を援助することができるんだ。」

一か月後、私はこの暴君の知遇に感謝し、心に発明発見の雄心を抱き、国や家のためという大望を抱き、一路順調にこの桜の島にやって来た。<sup>3</sup>

実学救国を標榜する甲種工業学校の許校長の推薦で日本留学を実現できた夏衍であったが、このときの旅行が彼の心に植え付けたものは、「中国が当面する状況のなかで、無駄な勉学をするのだ、卒業証書を手にするのだ、学位を得ることなどでは、本当のところ国を救えるはず

がないと思うのです。』<sup>4</sup> というものであった。このような問題について話し相手がいない状況下で、彼は出口が見いだせず、次第に孤独感を味わっていく。そのような状況下で、同級生の鄭漢先らと共に明治専門学校内に社会科学研究会というサークルを組織し、次第に社会に対して目を向け始める。

## 第2節 『船上』について

夏衍が実学救国に対して懐疑的になっていくのは、実は1923年の秋以降のことではないと考えられる。その約1年前に発表した『船上』という作品において、すでにその萌芽は見いだせるのである。

つぎに、『船上』を見てみよう。<sup>5</sup>

この作品は夏衍が1922年9月1日、「筑後丸」に乗船し、上海から長崎までの3日間で経験したことが3部構成で描写されている。

（第一部）船が出港する間際の埠頭の情景、見送る人と見送られる人との別れの場面をまず描写する。出航後、甲板上で作者の分身と思われる中国人留学生Cは顔見知りの、同じく中国人留学生のYと偶然にも出会う。Yは自身の東京予備学校時期のアルバイトに明け暮れた日々の苦勞を語る。最後には中国国内の内戦状況に話は発展する。

（第二部）先ず三等船室の間取りの紹介を行う。同じ三等船室内でも格差がある。その船室の外側は狭いうえに5、60人の労働者がすし詰め状態で押し込められている。内側の部屋は比較的広いうえに、一人用のベッドが設置されていて、食卓まである。この部屋は十何人の日本人と中国政府派遣の冗員用である。外側の部屋のCたちは船酔いで吐く音、怒鳴り声、鼾の音の中で長い夜を過ごす。

（第三部）は引用・訳出してみる。<sup>6</sup>

「こんな風と波では、恐らく明朝長崎に着くのは無理でしょう！」と若い学生が寧波訛りでボーイに話しかけた。皆は驚いた。実はボーイがとても穏やかな顔つきで、しかも笑みまで浮かべて、「明日の午後には到着するでしょう。たいへんお疲れ様です。……私はあなたと同郷です。寧波のどちらですか。」と言ったからだった。

機を見るに敏な労働者がふいに、「あのう！いつ頃横浜に着けますか」と言った。

「なんだと！おまえらのようなブタは日本の警察が上陸を許可するかどうかまだ分らん。横浜や神戸で追い返されたら、また俺たちがお前たちブタの世話をしなくちゃなんのだ。」ボーイは非常に激しく、ブタという二文字に力を入れて罵った。その声は大きく、ある種形容しがたいほどの残酷な響きが室内に充満した。

このような空気が3日間続いた。3日目—上海を離れて3日目—午後3時に、船は長崎に

着いた。汽笛を何回か鳴らし、船は止まった。長崎に上陸するために、皆は慌ただしく荷物の片づけを始めた。あの労働者たちも春の虫のようにガヤガヤと話をし始めた。

しばらくすると、鋭い声が響き渡った。二人の白い制服姿の警察官が入ってきた。一人はハンカチで鼻を押さえ、もう一人は手に紙を持って、不自然な声の調子で、「崔はいるか。崔〇〇——どこにいる？」

「私です。何でしょうか。」一人の学生が流暢な日本語で答えた。

「本籍はどこだ？」

「上海です。」

「上海語はできるか。」

「できません。小さい頃から日本に住んでいますから。」

「荷物はどれだ？」

その人は警察官と荷物を取りに行った。しばらくして、皆は口々に、「朝鮮人だから捕まったんだ。」と言った。

CとYは長崎に上陸するために、慌ただしく荷物を片付け、制服を着て、甲板に出ると、上海で疫病が発生したため、隔離所で一晚過ごした後、明日釈放されると分かった。

小舟でCやYたちは小島の隔離所に連れて行かれた。

——どうして3等船室の者だけが隔離されるのだろうか？1等船室、2等船室の連中は疫病に感染しないとでもいうのか？

——どうして朝鮮人だけが任意に逮捕されるのだろうか？彼は亡国の民だから。逮捕されなかった俺たちは戦禍で荒れ果てた祖国、いたる所で戦争が繰り広げられている祖国にそれでも感謝しなければならないのだろうか。

——日本人と寧波の出身者はボーイに用事を言いつけられるのに、労働者はどうしてそれができないのだろうか。日本人に対する親切は善隣、寧波出身者に対しては郷土愛か？

Cは寂しい隔離所で過ごしたその夜、いろいろな疑問が湧いてきた。その夜、長い間、自問自答に忙しかった。翌早朝、CはYと分かれて、汽車に乗って彼の勉学の場所へ向かった。しかし、さまざまな疑問には依然として何一つ満足な答えは出せなかった。

1923年1月15日、戸畑にて

以上が（第三部）の翻訳である。この（第三部）では、夏衍が厳しい現実の洗礼を受け、自問し、答えが導き出せずに、大いに悩む。そして、これが彼が現実社会に対して漠然とではあるが、目を向け始めるきっかけとなる。

1) 「どうして3等船室の者だけが隔離されるのだろうか？1等船室、2等船室の連中は疫病に



感染しないとでもいうのか？」ここでは貧富の差、不平等という現実に対する夏衍の不満が現れている。

2)「どうして朝鮮人だけが任意に逮捕されるのだろうか？」ここでは人種差別という現実に対する夏衍の不満が表出している。

3)「日本人と寧波の出身者はボーイに用事を言いつけられるのに、労働者はどうしてそれができないのだろうか。日本人に対する親切は善隣、寧波出身者に対しては郷土愛か？」ここでは同国人のボーイの奴隷根性という現実に対する夏衍の不満が噴出している。

この作品は「1923年1月15日、戸畑」にて脱稿している。そしてこの作品の舞台は1922年9月1日から3日間である。以上見てきたように、「1923年秋」の約1年前において、夏衍は、曖昧模糊としていて明確な回答は導き出せていないが、自分の周りの現実を直視し始めていくのである。

この作品は夏衍の将来の『包身工』系列作品につながる、その萌芽的な作品といえるであろう。<sup>7</sup>

## 第2節 1923年のもうひとつの「多事の秋」

さて、夏衍の1923年のもうひとつの「多事の秋」、すなわち人生初の失恋をつぎに見てみよう。

杭州には当時、有名女学校があった。1904年創立の浙江省立女子師範学校（略称省女師）である。創立当時は杭州女学堂といい、現在の杭州市第十四中学の前身である。住所は東城横河橋許家花園。封建礼教に反対し、男女平等を唱道し、女性の解放を勝ち取るという大変先進的な学校であった。

浙江省立女子師範学校（現杭州第十四中学）の1904年～1927年の沿革を簡単に示すと、つぎようになる。

1904年（清光緒三十）、杭州教育会は女子教育の重要性を認識し、杭州女学堂を創設する。学生数45名。初代校長は顧文郁であった。1907年、杭州女学堂は杭州女子師範学堂に発展・改称される。1911年、杭州女子師範学堂は私立から公立になり、校名も浙江官立女子師範学堂に改称される。さらに翌1912年、浙江省立女子師範学校に改称され、師範本科は四年制になった。そして10年後の1923年、浙江省立女子師範学校は浙江省立女子中学校になり、さらに1927年には浙江省立女子中学校と浙江省立第一中学校の合併により浙江省立第一中学が誕生する。<sup>8</sup>

さて、1923年の夏休み、夏衍は初恋と失恋を経験した。つぎに、陳堅、陳抗共著『夏衍伝』を要約してみることにする。

## 夏衍と蔡淑馨

夏衍は1923年の夏休み、杭州に帰省した。ちょうど浙江省立女子師範学校も夏休みに入っていた。実家が市外にあり、両親の厳しい管理を嫌う女子学生たちは、帰省せず夏休み期間中、杭州に残り、西湖周辺の尼寺の空き部屋を借りて、読書三昧の休暇を過ごすのが慣例であった。偶然、夏衍は、実家が桐郷の女子学生銭青と知り合った。彼女の口から、彼女と同室の女子学生符竹因のことを知った。符竹因は、眉目秀麗、性格温厚、且つ多芸多才、琵琶や月琴、マンドリンを弾き、歌まで歌える。さらには緑漪というペンネームまでもつ詩人でもあった。夏衍は銭青にぜひ紹介の労をとってほしいと願い出る。

ある日曜日の早朝、夏衍は一冊の詩集を手にして、指定された湖畔で静かに待った。9時になると、濃紺の上着に黒いスカートを身にまとった2人の少女が彼のほうにやって来た。一人は銭青、もう一人が長い髪を風に靡かせ、大きな目の美しい娘、符竹因であった。3人は西湖に船を浮かべて遊び、山に登り、六和塔に上り、黄昏時まで遊んだ。

夏衍は符竹因に求婚の気持ちを匂わせる手紙を出した。ところが、彼女にはすでに恋人がいた。浙江省立第一師範学校の学生である。彼は愛情詩集『蕙的風』を出版したことですでに有名になっていた汪静之であった。

夏衍は悄然と符竹因の前から姿を隠した。絶望的な苦痛を味わった夏衍は、食事もうろくに喉を通らないほどの失意のどん底を経験した。

この状況を心配したのが夏衍の母の徐綉笙であった。『留東外史』のような悪弊に染まらず、そして日本で婚約者を見つけることのないように、強く息子に言いつけた母。その言いつけを守り通してくれた息子もすでに24歳の結婚適齢期になっていた。

失意のうちに日本に向かった息子を見送って、徐綉笙は息子の終身大事を真剣に考えた。彼女は彼女の実家の徳清で結婚話を決めた。彼女の眼鏡にかなったのは、杭州緯成絲織公司駐上海総経理の長女蔡淑馨であった。

蔡淑馨はもともと杭州省立蚕桑女子学校に学んでいたが、1921年、浙江省立女子師範学校に編入し、銭青、符竹因のクラスメートになっていた。

以上が『夏衍伝』の夏衍と符竹因の出会いと別れ、そして蔡淑馨の登場の場面の要約である。<sup>9</sup>

### 第3節 夏衍『日本日記（1925年）』の中の符竹因

夏衍の初恋の相手、符竹因について、夏衍は『日本日記（1925年）』の中で、たった一度だけ記述しているところがある。『日本日記（1925年）』2月28日である。つぎに引用してみる。<sup>10</sup>

2月28日。化成の手紙を受け取る。

人類の天恵を懐旧するのも人類特有の苦痛の源である。つまり、人間は義憤慷慨し、傷跡を撫でるのが好きだ。私は今晚、竹英<sup>11</sup>がくれたたくさんの手紙を取り出して、読み返してみた。全くの夢——悪夢のようだ！私は本来去年の日記に書こうと思っていたことを今ここに書こう。——私は竹英に対して、半年間手紙での交際はあったが、彼女のすべてを、私は依然として知らない。私が知っていることは他でもなく、彼女は情熱的で、情感的で、プライドの高い女性であるということだ。……（略）……彼女と（汪）静之との恋愛は、彼女が私と知り合う前に成立していたことである。亦奮が私たちを紹介してくれたとき、彼女はかつて亦奮に「私たちは永遠にお友達でいましょう！」と言ったことがある。それは私が正直に自白しなければならない。それで彼女が後に拒絶の回答をし、亦奮が私に代わって半公式的な求婚をしたとき、彼女は「私はとっくに私たちは永遠にお友達でいましょうと言ったでしょう！」と言ったことは十分すぎるほどの理由である。だから、誰かが不平を漏らして、「彼女は恋人がいるのに、なぜさらに他の男性と交際しようとしたのか」と言った。それは確かに彼女の一面を責める理由ではあるが、しかし、私は逆につぎのように言いたい。（別に私は彼女を弁護するつもりはないが）。「きみは尋常な目で竹英を見なくてはならない。実際、誤った先入観がある。私の観察するところでは、竹英は反抗精神に富んだ人であるが、しかし、一面日本人が言うところの「無頓着」という特色を持っている。この点に注意しなければ、「放縦」との誹りを免れない。彼女が学校で受けた干渉や同学から受けた嘲笑の原因は、その大部分がこのふたつの性質によるものだと私は思う。彼女と静之の間の起因と程度については、私が検討する必要はないし、また私の検討を必要ともしないであろう。彼らの今の同居後の感情は依然良好であることがそれを立証している。だから、私は彼女に対しては少しも悪感情を持っていない。たとえ当時先天的、報復的な感情を持ったことは否めないが。彼女が私を拒絶したと思い、それが私の自尊心を傷つけ、少なからず紳士的な復讐の衝動に駆られた。例えば、「私は努力して必ず有名な人物になってやる。静之が遠く及ばないような人物になってやる。」或いは、「私は必ず竹英に勝る恋人を手に入れて、彼女に多くの羨望と少しだけ後悔をさせてやる！」というようなことを。……しかし、このようなことはそのほとんどが一時の子供っぽい怒りに過ぎない。光り輝く理智的な鏡、情熱的な濃霧も

奈何せんそれを得ることはできない。況や、あれらの希望は哀れなほど無聊である。前者は当然敢えて過分の願望はしない。後者については、私は理想に近い結果が手に入れられるといつも思っている。私は現在、彼女と静之に対して、相当の敬意を表明している。なぜなら、彼らは悪社会で奮闘しているのは確かであるからだ。恋愛のために奮闘して成功した勇士であるし、特に竹英が私を拒絶したことはさらに痛快なことであった。私は、このような拒絶や誘惑の勇氣を持たなければ、恋愛を語る資格はないと思っている。これは無事の、無自覚な誘惑者であり、本当に哀れむべきである。世の中の青年男女よ！恋愛したいか？それならば、電流の様を見てはならない。なぜなら、もっとも抵抗の少ない回路に向かって流れるからだ！私は大声でそのように叫びたい。

最後に、私はこのような感想を愛する淑——私の白百合——に告白しなければならない。

(上記のまとめ)

以上の日記の内容から以下のことが理解できる。箇条書きにしてまとめてみる。

- 1) 夏衍は符竹因に会ってまもなく交際を断られたのではなく、二人は半年間も交際していたことがわかる。実際には文通による交際である。つまり、1923年8月ごろに知り合って、1924年の2月ごろまで手紙のやり取りをしていたということである。
- 2) 符竹因は夏衍と知り合う前に、すでに汪静之と恋愛関係にあった。
- 3) 結婚を匂わせた手紙を送った夏衍に対して、「私たちは永遠にお友達でいましょう」と符竹因から拒絶された。
- 4) 夏衍から見た符竹因は、情熱的で、情感的で、プライドが高い女性である。そして、反抗精神に富んだ人だが、「放縦」なところがあり、自堕落との誤解を招きやすい人でもある。
- 5) 夏衍は1925年にはもう、符竹因に対して全然悪い感情を持っていないこと。拒絶されたことを今では痛快なことと思えるようになった。
- 6) 結婚を前提とした交際を半年後に断られた1923年当時の夏衍は、自尊心が傷つき、復讐の衝動に駆られ、「私は努力して必ず有名な人物になってやる。静之が遠く及ばないような人物になってやる。」或いは、「私は必ず竹英に勝る恋人を手に入れて、彼女に多くの羨望と少しだけ後悔をさせてやる！」といった一時の子供っぽい怒りにも似たものを感じていた。
- 7) 「私は必ず竹英に勝る恋人を手に入れて、彼女に多くの羨望と少しだけ後悔をさせてやる！」については、理想に近い結果が手に入れられると思っていること、つまり、現在蔡淑馨と恋愛中であるということが理解できる。
- 8) 夏衍は古い結婚スタイルに反抗して、古い社会と奮闘して自由恋愛から結婚を勝ち取った符竹因と汪静之に対して敬意を表明している。

## 第2章 1924年夏休みの夏衍の帰省について

### 第1節 夏衍『新月之下』——1924年夏休みの帰省の証明(1)

夏衍は1924年夏休みを利用して杭州に帰省した。今回は実家に帰る単なる帰省ではなく、陳堅・陳抗氏がその著『夏衍伝』<sup>12</sup>で仮説を立てているように、蔡淑馨との見合いのための帰省でもあった。そうでなければ、夏衍の『新月之下』および『聖誕之夜』の二作品は生まれなかったであろう。そして、夏衍が1924年夏休みに帰省したことについては、夏衍の『新月之下』および『聖誕之夜』から証明可能であろう。

まず、夏衍『新月之下』<sup>13</sup>の原文を引用してみよう。さらには引用文から、当時の夏衍の留學生活の状況や彼がその当時抱えていた心の問題についてもあわせて見ていきたい。フィアンセを愛しく思う夏衍の気持ちがひしひしと伝わる作品である。

彼はゆっくりとN海岸<sup>14</sup>を歩いた。平坦で滑らかな灰色の砂には雑然と多くの足跡が残されていた。

新月は魚のように白く淡い光を放っていた。月はもう倦んでしまった海と恐ろしいほど鬱蒼とした松林を照らしていた。前者は月明りで無数の蛇のように映っていた。後者は悪鬼にも似た黒い影を落としていた。幽遠とした引き潮の波の音のほかは、この大自然の休息の間には、二つ目の波の音はなかった。少し肌寒さを感じる夜風に、湿った生臭さと塩気を含んだ海藻の臭いがあった。しきりと引いては寄せる波、延々と続く砂浜にある種海岸特有のいい匂いが感じられた。

彼は新月を見つめたまま、そっとため息をついた。

秋の虫がゆっくりと悲しげな調子で歌い始めると、海辺の光景にいつそう寂しさを添える。月の光によって砂浜に彼の影が映し出された。痛ましいほどさらに痩せたと思った。彼の深く落ち窪んだ目から知らず知らずのうちに涙が溢れ出した。ひと筋、又ひとすじと、心の悩みで痩せこけてしまった彼の頬を涙が伝わり落ちた。……(略)……

祖国を離れてまだたった2か月だが、彼はもう10年も彼女に会っていないような狂おしい気持ちになった。

大きな海鳥——日本ではウミネコとよばれる大きな鳥がまるで影のように素早くかすめ飛んで行った。目の前の海上に浮かぶ小島に灯る明かりはまるで蛍のように瞬いている。彼は何となく木の切り株を探して腰を下ろすと、ぼんやりと故郷の方角に目をやった。……(略)……愛しい人よ！そう思うだけで、彼の全身には燃え滾るような熱い血が湧いてくる。彼は彼女が自分のすぐそばにいないような感覚に囚われた。ある種名状しがたい漠たる感覚がまるで電光のように彼の頭から足先まで流れ、彼は知らず知らずのうちに、まるで彼女を抱きし

めようとするかのように、両腕で強く胸を抱きしめた。

極度の苦悶と甘美な体験は心から取り除くことはできない。特にこのような静かな夜には、容易に生き生きと思い出させもし、また容易に幻想を逞しくもさせる。彼の体は木のよう  
に海辺に存在しているが、彼の心にはひと幕ひと幕と過去の人生の悲喜こもごもが現れてくる。彼は2か月前のことを回想した。

東南の陣太鼓が打ち鳴らされ、K、C両省の人々の気持ちが不安に陥った頃、彼女は父親からの手紙を受け取った。彼女は外祖母のところから離れ、彼女の好きな町Hともしばらく別れなければならなくなった。彼女が最も嫌いな都市S市へ発つ日の午後、彼ら二人は東駅のプラットフォームに並んで立っていた。普段からあまり饒舌でない彼は悲しみに包まれて、もっとたくさん話をしなければならないのに、何から話したらいいか分からなかった。駅の中はひどく混雑していたが、彼は周囲の状況などまったく眼中になかった。彼は胸がドキドキしていた。はっきりと自分の胸の鼓動が聞き取れるほど、激しく胸の鼓動が波打っていた。まるで時計の秒針のように別れの時間が一秒一秒迫ってくるように。彼らは強いて考え出した話のほかは、本当に話しておかなくてはならない話は一言も話せなかった。彼女が以前、雑誌『創造』の再刊の見込みがあるかどうか尋ねたことなど。そして、そのとき、彼女は熱心に郁達夫のメランコリーを賛美したことをまだ微かに覚えていた。しばらくして、彼女は汽車に乗った。汽車が動きだした。彼は汽車の窓のところに彼女の姿を見つけた。谷間に揺れている一輪の白百合のようであった。2日後、彼はSからの手紙を受け取った。

「汽車が動き出したとき、私はあなたに笑いかけた。がんばって笑いかけた。でも他の乗客の威勢に押されて、こみ上げてきた涙は抑え込まれてしまった。……私の全身の細胞は怨みと悲しみで幾重にも包まれ、心臓は狂わんばかりに飛び跳ねていた。でも、どうにもできなかった。ただ汽車のゴトンゴトンという音だけが聞こえていた。そして、黄色や緑色のものが後方に飛んで行った。自分の世界を紐解き、少しばかりの鎮静剤を探したい。しかし、小さなたくさんの黒い点が灰色の紙の上を飛び跳ねているだけ。ああ！私は飛び出したい。飛び出して帰っていききたい。——別れがこんなに苦しいものだとは知らなかった！

戦争がまもなく始まる。あなたはどのように早く火の穴から抜け出そうとしないの？  
…」

この手紙を彼は何度繰り返して読んだことか。すらすらと自然に諳んじることができる。この手紙を諳んじれば、同時に彼の頭の中には、彼女の愛用した水色の——それは純潔を象徴する水色の便箋、そして彼女の独特な細長い、やや斜めの字体をも思い浮かべることができ

た。彼は彼女の手紙を読んだ数日後、年老いた母と分かれた。母は死んでも故郷を離れたくないと言い張り、何度なだめても頑としてその意思を曲げなかった。彼は慌ただしく兄と一緒にS市に着いた。

彼女はS市に住んでいた。しかし、彼女の家には頑固な父親と融通の利かない継母がいる。彼は勿論彼女の家には行けない。相変わらず目に見えない壁が存在している。彼女の言うように、「咫尺千里」が存在しているのである。

彼女は軟弱な、悩み多き少女である。しかし、これは彼女の天性のものではない。幼くして優しい母と死別し、数年後には彼女にとって姉妹のような親友をも亡くした。彼女の優しい精神に、癒すことのできない悲哀の烙印が深く刻み込まれた。このことが現在の彼女の性格を形成した最大の要因である。彼女は叔本華の厭世を信じていたので、あるとき彼女は彼に手紙を出した。「私は家にいても、自分が家にいるのか、それとも牢獄にいるのか自分でもわからない。私の周囲は鉛のように冷たく重い。私は水から離れた魚です。私は砂漠の中の孤島です。」

あの日の午後のことは忘れることができない――

彼はN通りで彼女と彼女の友人のC女士にばったり出会った。彼らは半日一緒にいられる機会を得たのだった。しかし、彼の山紫水明の素晴らしい故郷と比べれば、このS市には散歩する場所さえなかった。彼は彼女たちと幾つか商館を回り、最後に彼女たちは彼の意見に賛同して、B会社の最上階に行って、比較的爽やかな空気を吸うことになった。彼女たちは最上階から大海をはるかに望み見た。彼が突然人生の渺小を嘆いたとき、彼女はただ微かに微笑んだだけだった。彼女の澄んだ瞳、白い歯は彼にとって二度と忘れることのできない記憶となった。そよ風に吹かれて頬になびく彼女の髪、細い眉、しなやかな肢体、彼女が当日着ていたピンクの服、黒いスカート、淡黄色のシルクの上着と淡い紫色の靴、目を閉じれば、彼の眼前にはっきりと浮かんでくる。

夕方、彼はひとりで彼女を送って行った。電車の中で二人は並んで座ることができた。彼女は彼に、家の中はつまらない、仮に戦争が長引けば将来勉強する所がなくなると言った。……話はまだあったが、シャイな彼女は俯いていた。彼女は気付かなかったが、彼はただじっと彼女を見つめていたのだ。ある種形容しがたい感情が胸いっぱいこみ上げてきて、深く彼の心を占領してしまった。S十字路に着くと、彼はほのかな、柔らかな街灯の下に立って、彼女がF路に入っていくのをじっと見つめていた。それから彼は一步一步気怠そうに宿に戻った。

この戦争が最も激しくなった頃、彼は自身の学業のため、愛する人と別れなければならな

かった。そして彼の祖国から離れなければならなかった。

彼がS市を離れる前日、彼女とC女士と一緒に彼女たちの同級生の家へ行った。目的地に着くと、彼はどうしても別れなければならないと感じ、悲しさを抑えて、彼女に言った。

「来年また会おう！きみは……」

「……」名状しがたい神秘的な表情をして、彼女は涙を流した。彼が角を曲がろうとしたとき、彼女はまだ同級生の家の玄関口に立って見ていた。

「私も私たちはあのようにそそくさと別れるべきではなかったと深く後悔しています。一昨日、私は波止場まであなたを見送りに行くつもりでした。でも、お兄さん！別れの苦しさにどうして私が耐えられるでしょうか。私たちを目的地まで見送ってくれたとき、あなたは突然私に来年また会いましょうと言いましたが、私は、私はあなたと少しでも長くお話がしたいと思いました。しかし、ことばが思いつかず、ただ木のように立ち尽くしたまま、あなたが一步一步と去っていく後姿を見ていただけです。あなたが角を曲がり、あなたの姿が見えなくなると、私は急に泣き出しました。……私たちは帰り道を間違えてしまいました。Cさんと彼女の友人が話に夢中になっていたからです。私はといえば、なぜだかわからないほどに頭がぼんやりしていたのです。帰宅後、さらに泣きそうになりましたが、家にはたくさんの人がいますので、普段のように我慢するしかありませんでした。その後、眠りが私を解放してくれました。」

彼は学校に着いて1週間後、彼女のこの手紙を受け取った。

初冬の寒さに帰宅を促されるように、彼は立ち上がった。彼の両頬は幾分熱を帯びており、両目はまだ涙で濡れていた。彼は千里も離れている彼女を思い、このような涼しい月の下、彼女はまだ海外にいる愛しい人を慕ってくれているだろうと思った。

海岸は古い墓場のように静まり返っていた。湿った重い空気が彼の上着の下を刺した。暗い波がひっそりと浜辺に打ち寄せている。月は少しだけ傾いている。月の光は砂浜の貝殻を照らしていた。それはまるで無数の宝石のように光っていた。海上の月影が天上の月を眺めるように、彼はこの空漠たる夜景をぼんやりと見ていた。

1924年11月5日在福岡

以上の『新月之下』の引用文の下線部の「祖国を離れてまだたった2か月だが、……」は、この夏衍の『新月之下』の脱稿日が1924年11月5日ということから判断すると、この引用文は1924年の8月～9月と推察可能である。したがって、夏衍は1924年の夏休みには杭州に帰省



していたことが証明され得る。さらに同じ『新月之下』の別の個所に、「彼は2か月前のことを回想した。」とあり、1924年の夏休みに、夏衍は蔡淑馨とすでに会っていたことが証明できるのである。

## 第2節 夏衍『聖誕之夜』——1924年夏休みの帰省の証明(2)

夏衍が1924年の夏休みに杭州に帰省していたことはさらに夏衍『聖誕之夜』からも証明可能である。

『聖誕之夜』の中に、「今年の9月、私が上海から学校に戻った時、……」(引用文中の下線部)とあり、夏衍の『聖誕之夜』の脱稿日が1924年冬であることから、1924年の夏休みに、夏衍は杭州に帰省していたことがやはり証明できる。この引用文の「学校」とは、明治専門学校のことである。つぎに、原文を訳出してその確認を行ってみることにする。さらには引用文から、当時の夏衍の留學生活の状況や彼がその当時抱えていた心の悩みについてもあわせて見ていきたい。<sup>15</sup>

私のHSよ！期末試験が今日やっと終わった。半月間、試験勉強に束縛されていた私は鳥籠から脱け出した小鳥のように、どんなに大風が吹いていようと、私の外出を阻止することはできない。私は寒さも恐れず、行き先も決めず、郊外に向かってしばらく歩いた。憂鬱な気分がずいぶんと回復し、夕方になってから戻った。多くの同級生たちがK市<sup>16</sup>の教会に行ってクリスマスを過ごすと言う。そこで私は今日が12月25日だとわかった。この一年がまたこのように慌ただしく過ぎて行っただ。

今晩はいつもより殊のほか静かだ。窓外のヒューヒュー哭いている風の音と机の上の小さな卓上時計の音以外は何も聞こえない。何十人と生活している寮もまるで森林の中のように静寂そのものだ。私はストーブのそばに腰かけて、ただぼんやりと考えていた。最初はこの一年の記念に、君に何かを買って送ろうかと。しかし、適当な物が思い浮かばないのだ。HSよ！私が君に贈りたいのは私の命だ。私の命はもう君に贈っているの、それ以上君に何を贈ればいいのか思いつかない。今晩が過ぎれば、今年も終わると言える。この一年、私は君に多くの悩みを送った。寂しいとき、誰かに侮辱されたとき、私はいつもそれらの悲哀の原因を語らずに、ただそれらの悲哀だけを君に訴えてきた。どれだけ君に悲しい思いをさせたことだろう。しかし、私にどんな方法があったらどうか。世界から排斥された私のような者が、この世界で、君以外に一体誰が私の哀訴を聞いてくれて、私を慰めてくれるだろうか。もともと神経質な私は、ここ数年、私は自分の性格が非常によくないことがわかった。私は蛇よりも暑い天気が嫌いだ。4、5人集まると、私はその中に加われない。ほんの些細

なことのために、すごく仲のいい友人であっても、後先の見境なく口角泡を飛ばして口論する。そのあと、私はいつも一人でいるか、或いはぼんやりと木の下に立っているか、或いは芝生の上に寝転んで、こっそりと涙を流してきた。このようなことが災いして、私は故郷から数千里離れたこの島国で、異国の同級生は言うまでもなく、何十人という同国人の間でも、私は彼らから変わり者と思われ、交際を断られてきた。私は才能を鼻にかけ、勝手気ままに振る舞うと一部の人は言う。勝手気ままに振る舞うところは私にはもちろんあるが、しかし、もし才能を鼻にかけると言うのであれば、それはまちがいだ。私のような凡庸な人間のどこに鼻にかけられるほどの才能があろうか。——今でも私は凡庸が一番嫌いだということは認めざるを得ない。実のところ、それは私の無上の苦痛だ。中学時代、私が一生懸命にやったことに対して、同級生たちから熱狂的に迎えられたり、逆に痛烈な攻撃を受けたりしたが、これらはみんな私の非常に憧れる過去のことだ。——それで、私の生活は、授業のとき以外は、私はただぼんやり座ったまま悲しみに浸っている。そのうち私は他のところに聖地があると思った。他の人には理解できない聖地が！それは沈黙だ！私は海辺の牡蠣よりももっと沈黙するのだ！

私が今取り組んでいる学問は実際、私の性格とはかけ離れている。私のような空想するばかりで実務のできない者は実際工業を学ぶことなんかできない。しかし、このような環境では、そこから脱け出すことなどできないのだ！4年前、私はA工業中学校を卒業するころ、私の尊敬する数学の先生が私に工業をやめて、新聞記者になったほうがいいと親切に忠告してくれた。それから他にも私に美術の道に進むように勧めてくれた人もいた。でも、今はどうだ、美術は言うまでもなく、全国を自由に駆け巡る新聞記者になることすらできない。力率能率、正弦曲線が私の一生の伴侶となった。なんと悲しむべき不幸なことか！私は忘れることができない。学校の施設のために、一度も私と反対の立場に立たないことはなく、私たちから世にも稀な暴君と見なされた校長が、去年亡くなった門番の魯昇に私を呼んで来させたときのことを。

「君は卒業後どうするつもりだね？」校長は尋ねた。彼の鋭い眼の光が私の心を射抜いた。

「……」虎の目の前の子羊のように、ただ震えていた。

「仮に君がここで学業をやめても、私は君のために職を探してあげるが、しかしそれは君のために惜しいことだと思う。」校長は少し励ますような口調であとを続けた。

「つまり、君は自分の道を誤ってはいけないということだ。もし君に進学する意思があるなら、学校から君の経済面を援助することができるんだ。」

一か月後、私はこの暴君の知遇に感謝し、心に発明発見の雄心を抱き、国や家のためという大望を抱き、一路順調にこの桜の島にやって来た。現在、あの頃の雄心は雲散霧消してし

まっている。私の恩師もすでに定年退職している。私はここまで書き進んで、思わずペンを  
攔き、ため息をついてしまった。君は感慨無量になる必要はない。

風が強い、窓を打ちつけている。まるで雪が降っているようだ。しかし、部屋の中は依然、  
春のように暖かい。私は君からの手紙を整理してみた。今年君からの手紙は65通。他人から  
見れば多いだろうが、私からすればとても少ない。これらの手紙は私の砂漠旅行の人生の唯  
一の慰めなのだ。私は一週間君からの手紙が来なければ、狂ったように君からの手紙を読み  
たくなり、また死んだように退廃的になる。そのような時、多くの奇妙な幻想的な恐怖が私  
を包む。時には、夢の中で泣き出したり、誰かからバカだと言われたりする。しかし、私の  
HSよ！私は君の手紙の中でいちばん残念なのは、君がなにかを言いかけて止めることだ。  
君の言うように、たとえ友人が私を理解できたとしても、私はこれらの無病の呻吟の退廃的  
な言葉で他人の気持ちをかき乱し、いつも楽しくないだろう。「異郷にいるあなたが私のこ  
とを心配してくれて、申し訳ない」といつか君の手紙に書いていたが、君の苦しみを、私が  
どうして知らないことがあろうか。しかし、君は、愛は苦しいが、甘美であることを知るべ  
きだ。美の魂の接触が与えることができるものはただ苦痛のみだ。私たちは苦痛の中から自  
己の生命を認識し、涙の中から甘美な安らぎを探し求めなければならない。……（略）……  
私のHS！気がふさぐときや悲しいときには、私が君に代わって涙を流していいときにはど  
うか私に言ってほしい。

世の中には不幸な身の上の人がたくさんいるが、母を亡くした女の子に勝るものはないと  
私は常々思っている。娘というものは愛の海の中を浮き沈みしている魚のようなものだ  
と言った人がいるが、そのとおりだ。魚が楽しく思うのは水があるからだ。君のように小さい  
頃から母親がいない人には感傷や退廃は当然あるべき産物なのだ。君の現在の母親の年齢は  
君とさほど変わらないのだから、その母親に愛情を求めることは無理なのだ。なにかあつて  
も、君は実の母親のように彼女に甘えることができるだろうか。たとえば、去年の秋のこと、  
もし君の母親が生きていたら、君をあのように悲しませただろうか。君の家庭状況は私には  
分からないが、しかし、7、80%はわかる。今年の9月、私が上海から学校に戻った時、L  
女士が彼女の弟といっしょに僕と同じ船に乗っていたんだ。彼らは君の家に寄寓していたこ  
ろの状況を私に話してくれた。

……（中略）……

彼らの簡単な話の中から、君が家の中ではどんなに寂しい生活をしていることか、君は水  
を失った魚、群れからはぐれた鳥だと私には理解できた。君がかわいそうだ。しかし、私の  
HS！厳しい暑さの砂漠の旅人は、往々にして清涼な肥沃な土地を夢みるそうだ。私たちも  
幻想して虚無の慰めを求めてもいいのだ。夢幻の王国にこそ青い空、常緑の樹木、象牙の船、

白銀の波しぶきがあるのだから。

この死のような沈黙が私はとても好きだ。この世間から解放されたようだし、心がゆっくりとのびやかになっていくようだ。以前私は黎明が好きだったが、近頃では逆に深夜が好きになった。深夜2時3時頃夢から覚めると、人生の幸福を一番感じる時間なのだ。強烈な光、車輪と機械の騒音によって疲れ切った神経がこのときだけ、本当の休息が得られるのだ。水にも似た真夜中、無人の小島に捨てられて、目を見張ってもどこが美しくてどこが醜いのかわからないようなものだ！！私は世の中のあらゆる醜さを目にしないで済む目の無いモグラになりたい……私はこう書いたが、しかし、もし本当に盲人になってしまうと、私は永遠に君が見られない。私はたとえ命がなくなろうとも、私の目を犠牲にはしたくない。

2年前、そうだ、私はF県<sup>17</sup>で初めてクリスマスを過ごしたときも私は同級生と一緒に行った。K市の教会に行き、にぎやかなクリスマスを見た——私のような信仰心の無い俄か信者はその華やかさを見に行ったようなものだ。当時、私はまるで獅子の石像のようにただじっと座っていたが、眠気が襲ってきたとき、私は発作的に極度のメランコリーを感じた。特に、水のように流れて行ったあの年月、花のように美しかったあの頃を思い出したとき。……(略) ……

つまり、世の中で一番不幸な人は、私のように芸術的才能がなくても芸術の花園から脱け出せない人なのだ。芸術の陶酔は望むべくもない以上、俗人の歓楽は妥協を望まない。結果、私と歓楽の神はまるで北極の凍った魚と南アフリカのヤシのようになる。

私は本来君に話さないつもりだったが、しかし、どうして言わないでいられようか。実は、3日前、試験期間中、私は浴場で突然卒倒した。その時はとても驚いたが、しかし、卒倒した時の恍惚状態を経験できたことを密かに喜んだ。その後、鏡に映った憔悴しきった己の顔を見て、思わず悲しくなった。私はここ数年来、病気をしたこともなければ、大きな不幸に見舞われたこともないのに、なぜこんなに憔悴しきってしまったのか、ただただ不思議だった。本来、私のような凡庸な人に生死など、世人の注目にも値しないが、死んだら、庭の中に野の花一輪さえも咲かないし、塀の根元の釘も腐るだけだと思われるだろう。しかし、再考すると、たとえこの一輪の野の花が本当に萎んでしまっても、君はこの花のために同情の涙を流してくれるなら、純潔な処女の涙の慰めを得られるなら、私は将来をどうして悲観することがあろうか。

クリスマス当日の夜の状況を君に聞いてもらった。君はもしかしたらたくさんの楽しい異国情調を期待していたかもしれないが、私が君に与えられるのはこの程度のものだ。

風は依然として吹いている。雪も依然として降っている。卓上の小さな置時計の針は今晚と明日の境界を指している。

1924年冬、T市において<sup>18</sup>

以上の『聖誕之夜』から知り得たことを以下に箇条書きにまとめてみる。

- 1) 夏衍の性格の一端が理解できる。すなわち、後先の見境なく口角泡を飛ばし、対手を論破しないではいられない性格である。そしてその口論の後は孤立感を自ら深める性格。そういう意味では夏衍はかなり感情の起伏の激しい人物で、当時は凡庸を極端に嫌っていた節が垣間見える。
- 2) 戸畑の明治専門学校で授業・実習を受ける中で、夏衍自身、性格的に工業には不向きであると気づき始めた。
- 3) 夏衍はジャーナリストや美術関係の職に就きたいという夢を持っていた。
- 4) しかし、実家が経済的に裕福でなく、進学をあきらめていた夏衍に許校長が援助の手を差し伸べてくれた。
- 5) そのおかげで、日本留学が実現し、その当時は許校長の実学救国に理解を示したが、次第にその考え方に疑問を持ち始めた。
- 6) 蔡淑馨の家庭状況、特に継母との関係があまり芳しくないことが読み取れる。

### 第3章 蔡淑馨の日本留学

#### 第1節 銭青「随夏衍赴日」

1925年に、浙江省立杭州女子中学校を卒業し、その後、夏衍のフィアンセ蔡淑馨とともに奈良女子高等師範学校に留学した経験を持つ一人に銭青がいる。

銭青の履歴について、周一川の『近代中国女性日本留学史』を参考に以下簡単にまとめてみる。<sup>19</sup>

銭青は、1905年10月15日（旧暦）浙江省崇徳（現桐郷）県石湾鎮に生まれた。父は銭松甫といい、商人だったが、銭青が幼い頃に亡くなる。銭青は豊子愷の長姉の豊雲が設立した崇徳県立石湾振華女校を卒業後、浙江省立杭州女子中学に入学し、1925年8月、同校を卒業する。1925年9月、奈良女子高等師範学校特別予科に入学し、翌年には本科生になり、教育学を専攻する。1932年、奈良女子高等師範学校を卒業した銭青は帰国し、浙江省立杭州師範学校の教員となり、日本語および日本文学を教授する。2年後、郁達夫の紹介で上海工部局女子中学に転任し、中華人民共和国成立までは華東基督教大学、暨南大学、上海工部局女子中学等で教育に従事する。中華人民共和国成立後は上海同济大学で日本語を教授し、1963年、定年退職を迎える。日中国交正常化後、70歳近い銭青は同济大学に戻り、新設された「留日教師日語培訓班」

## 夏衍と蔡淑馨

で日本語を教授すると同時に、日本の文学作品の翻訳に従事する。銭青は奈良女子高等師範学校を卒業以来、50年以上教育に従事した人物である。

銭青は夏衍の訃報に接し、往時を振り返り、夏衍を偲ぶ文章を『文匯報』に寄稿した。つぎに、銭青の『随夏衍赴日』<sup>20</sup>を見てみよう。以下に全文を訳出してみる。

朝起きて、新聞で夏衍さんの訃報に接し、深い悲しみを覚えました。彼の90歳のお誕生日に、お手紙をいただいたことを覚えています。その数年前、彼は休養のため杭州に帰省されましたので、私は急いでお会いして、彼の政治、経済、文学、芸術面のご高見を詳しく伺いました。さらに、60年前に彼が私たちを引率して日本へ留学に行った時の情景にも話が及び、多くの貴重な教訓を得ました。話せば話すほど愉快になり、その時の彼の声と笑顔が今でもありありと眼前に浮かびます。あの時の面談が永遠の別れになろうとは夢にも思いませんでした。

1925年8月、私たちは浙江省立杭州女子中学校を卒業しました。進学して造詣を深めるようにとの葉墨君校長の励ましを受けて、私のクラスメートの5人——葉稚棣、蔡淑馨、程馥、陳楨、高耐玉と私は日本に赴き勉強することを決定しましたので、校長先生から大いに称賛されました。校長は私たちのために浙江省教育庁に申請してくれました。当時、教育庁の秘書長は銭学森の父であり、且つ葉校長の同級生でした。おかげで留学手続きはとても順調に進み、あとは旅装を整えて出発を待つばかりでした。

当時、私たちは皆わずか16、7歳の女子学生でしたので、誰が私たちを日本へ連れていけばいいのか、それが大きな問題でした。折よく、蔡淑馨のフィアンセの沈端先（夏衍の学名）が夏季休暇で帰省中であり、8月には日本へ戻るということでしたので、葉校長は彼に私たちの引率を託したのでした。

その直前、蔡淑馨の親友であり、私たちのクラスメートの程馥が一度も出会ったことのない男性との結婚を父親から迫られ、さらに父親から日本留学を許可してもらえず、程馥は終日泣き続け、終には病床に伏してしまいました。夏衍はこのことを知ると、とても憤慨し、彼は蔡淑馨と共に即日急いで程家に赴き、あれこれ情を尽くして説得した結果、程馥を杭州に連れ戻して治療を施すことができました。このおかげで、程馥はようやく私たちと同行できるようになったのでした。

1925年8月15日、私たち6人は夏衍について長崎丸に乗船して日本に向かいました。小学校の同級生で、茅盾夫人の孔徳沚、沈澤民夫人の張琴秋（のちの紅軍將軍）、さらには同級生の親族、友人などが見送ってくれました。私たちは岸壁で見送ってくれる人たちと赤や緑

色の紙テープを握り合って、恋々といつまでも手を振って別れを惜しました。

船上では、張聞天の弟の張健爾、浙江省杭州の画家張屏南、のちに名監督となる沈西苓と出会いました。彼らは船上では、執筆したり、絵を描いたり、歌を唄ったり、とてもにぎやかでした。ところが、私たち女子学生はほとんどのものが船酔いをし、嘔吐に苦しみました。夏衍は水や菓を運んで来ては甲斐甲斐しく世話を焼いてくれました。彼は船酔いした学生たちの気持ちを和らげるために、なんとか私たちを甲板に引っ張り出して、私たちのために日本の政治、経済や日本人の風習、生活習慣について話してくれました。私たちの船酔いに対する心理的負担を軽減するために、特に日本の女性の状況について話してくれました。彼はまた、日本の中国侵略の野心について悲憤慷慨しながら話してくれました。日本の子供たちがおやつ代や飴玉を買ってほしいと両親にねだると、両親は、お前が大きくなったら「支那満州」へ行きなさい、そこには何でもあるからと教えるのだと言いました。日本の中国敵視、中国侵略の野心はもはや人々の心の中に深く入り込んでいるのだと教えてくれました。彼は人に対して穏やかであり、誠実であり、微に入り細を穿つように教えてくれるので、私たちは知らず知らずのうちに祖国および自然界に対する愛情を強くしていきました。

船が神戸に着くと、私たちは上陸し、女子学生の手荷物はすべて夏衍さんに押し付けました。彼の両手両肩は荷物でいっぱいになりました。私は笑いながら、沈さんは重い荷物を積み、遠い道のりを行くまるでラクダそっくりだと言いました。この戯言は、ところがなんと、解放後、私が彼の家に行くと、彼はまだ記憶していて、意味深長につぎのように言ったことがあります。あなたは以前私のことをラクダだと言ったでしょう？私はラクダになりたいですよ、ははは……

神戸に着くと、私たちは夏衍さんの案内で汽車に乗って日本の古都奈良に行きました。すでに連絡を取っていた日本国立奈良女子大学特設予科に入学したのでした。夏衍さんはずっと私たちの入学手続きをすべてやってくれました。しかも私たちを学校の宿舎に案内して、落ち着き先を手配してから、ようやく奈良を離れて福岡電機大学に戻りました。彼の穏やかな物腰、他人に対する援助を喜びとし、またとことん援助の手を差し伸べ、情熱的で親しみやすく、誠心誠意他人に尽くす彼の精神には、非常に感服しました。

夏衍さんはかつて東京の小劇場に行き、日本の進歩的劇作家や文学者、名監督、俳優たちといっしょに文学研究や演劇創作をし、演劇や演出等の活動を行ったことがあります。彼は後に文学やシナリオ、監督等の仕事において素晴らしい貢献をしましたが、固より彼自身に素晴らしい才能があったことはもちろんですが、当時の彼の生活と無関係ではないと思います。

彼は帰国後、上海復興中路の蔡叔厚が経営する電気会社に居住していたことがあります。

彼はここでゴーリキーの『母親』を翻訳しました。当時、日本から帰国した進歩的留学生は一時期仕事が見つからず、例えば江聖達など日本留学から帰国した多くの青年がここに身を寄せていたことがあります。

解放前、上海話劇団が蘭心大戲院で『慈禧太后』を上演したことがあります。夏衍さんは脚本家グループの一人でした。俳優陣には王瑩や江青らがいました。江青は王瑩と主役の慈禧の役を争いましたが、王瑩は演技や扮装姿において江青より優れており、特に演技が慈禧に最適でしたので、江青は落選しました。彼女はこのことで夏衍と王瑩に対して怨みを持ち、「文革」中、夏衍は激しい迫害を受け、7年の長きにわたって投獄され、更には激しい暴力を受け、身障者になってしまいました。もちろん、他の原因もあるでしょうが、上述のことと無関係ではないでしょう。

夏衍さんの90歳のお誕生日に私はお祝いの手紙を送りました。彼はすぐに自ら手紙を書き、私に返信してくれました。今日読み返してみても、彼の情熱が万感胸に迫ります。夏衍先生のご逝去に深く哀悼の意をささげます。

## 第2節 銭青『随夏衍赴日』と夏衍『日本日記（1925年）』の内容比較(1)

銭青は『随夏衍赴日』の中で、つぎのように回想しているところがある。

「その直前、蔡淑馨の親友であり、私たちのクラスメートの程敷が一度も出会ったことのない男性との結婚を父親から迫られ、さらに父親から日本留学を許可してもらえず、程敷は終日泣き続け、終には病床に伏してしまいました。夏衍はこのことを知ると、とても憤慨し、彼は蔡淑馨と共に即日急いで程家に赴き、あれこれ情を尽くして説得した結果、程 yáng を杭州に連れ戻して治療を施すことができました。このおかげで、程敷はようやく私たちと同行できるようになったのです。」

この部分を夏衍の『日本日記（1925年）』<sup>21</sup>でみてみよう。

8月21日

午前6時に尼寺に行く。私は淑と車に乗り江頭に行き、恒泰号という船に乗り新登の程国敷君を訪問。先に淑は13日前に、かごで窄溪で待っているように手紙を出していた。私たちが窄溪に着いたときはすでに午後5時半になっていて、すでにかごは見当たらず、しかたなく小船を雇って渚渚まで行く。それから渚渚からかごに乗り新登の程の母宅に着いたときはすでに午後11時半。この日は私の人生の中で最もロマンチックな1日だった。

8月22日

午前、袁宅へ行く。程君産後で甚だ衰弱していた。淑はこっそりと私に言った；「彼女の青



春は子供と引き換えてしまった。」感慨に耐えない。その晩、10時ごろまで語り合った。

8月23日

早朝5時、新登からかごに乗り、富陽へ行き、富陽から新振興号に乗り杭州に帰る。

9月2日

程国敷すでに杭州に来ており、同行の予定。

以上、夏衍『日本日記（1925年）』8月21日～23日、および9月2日の日記である。この日記からより深く程国敷の状態が理解できる。

### 第3節 銭青『随夏衍赴日』と夏衍『日本日記（1925年）』の内容比較(2)

さて、銭青『随夏衍赴日』には、「1925年8月15日、私たち6人は夏衍について長崎丸に乗船して日本に向かいました。」との記述がある。しかし、夏衍『日本日記（1925年）』の8月15日には、「8月15日。8時頃、淑の所へ行き、しばらく話をし、共に昼ごはんを食べた後、午後4時李宅へ行く。」<sup>22</sup>となっている。したがって、「1925年8月15日、私たち6人は夏衍について長崎丸に乗船して日本に向かいました。」という年月日は、明らかに銭青の記憶違いである。

それでは一体いつ夏衍たちは上海を出発し、日本に向かったのであろうか。夏衍『日本日記（1925年）』を見て確認してみよう。

「9月1日。午後、銭青から手紙がきて、4時ごろ城内で陳穰に会おうと招待される。上海丸のチケットの購入を頼む。」

「9月3日。朝一番の列車で上海へ行く。」

「9月4日。長兄へ手紙を出す。12時、駅に着き、淑らを迎える。同行者は淑の他に、陳之麟、楊緑湘、高耐玉、魏××女士の4人。蔡紹敦の招待で、大西洋で夕食、映画『花好月円』を観る。淑、家に帰る。」

「9月6日。強風。上海丸出航不能。やむを得ず振華旅館に戻る。」

「9月7日。午前8時半出航。午後風波非常に大きくなる。私は激しく吐く。ただ淑、国敷、魏らは頗る元気。」<sup>23</sup>

上記の『日本日記（1925年）』9月1日～9月7日を見ると、夏衍は9月3日に夏衍の実家のある杭州駅を朝一番の列車に乗り、上海へ行き、翌9月4日12時に上海駅で待ち合わせをしていた蔡淑馨たちと出会った。食事をし、映画を観た後、蔡淑馨だけが両親の住んでいる上海

の実家に帰り、他の者は振華旅館に宿泊する。9月6日に上海丸で上海を出港して長崎に向かう予定であったが、強風のため、長崎丸は出航できなくなり、夏衍たちは振華旅館にもう一泊する。そして9月7日午前8時半に夏衍や蔡淑馨たちは上海を出港して長崎に向かった。

以上のように、9月1日～9月7日の日記は解読できる。

#### 第4節 銭青『随夏衍赴日』と夏衍の『日本日記（1925年）』の内容比較(3)

さらに、銭青『随夏衍赴日』にはつぎの記述がみられる。

「船が神戸に着くと、私たちは上陸し、女子学生の手荷物はすべて夏衍さんに押し付けました。」

「神戸に着くと、私たちは夏衍さんの案内で汽車に乗って日本の古都奈良に行きました。すでに連絡を取っていた日本国立奈良女子大学特設予科に入学したのです。夏衍さんはずっと私たちの入学手続きをすべてやってくれました。しかも私たちを学校の宿舎に案内して、落ち着き先を手配してから、ようやく奈良を離れて福岡電機大学に戻りました。」

先ず前半の「船が神戸に着くと、私たちは上陸し、女子学生の手荷物はすべて夏衍さんに押し付けました。」というくだりであるが、実は、夏衍たちは9月7日に上海を出航して、直接神戸港に入港したわけではないのである。

夏衍『日本日記（1925年）』を見てみよう。

「9月8日。正午、長崎に到着。私は国馥と淑とともに諏訪公園商品陳列館に遊ぶ。午後5時出航。」<sup>24</sup>

夏衍たちは9月7日に上海を出港して、翌9月8日に先ず長崎に入港する。夏衍は蔡淑馨たちといったん長崎に上陸し、諏訪公園商品陳列館<sup>25</sup>を参観する。参観後の当日午後5時に再乗船し、長崎から神戸に向かったのである。

つぎに後半の、「神戸に着くと、私たちは夏衍さんの案内で汽車に乗って日本の古都奈良に行きました。すでに連絡を取っていた日本国立奈良女子大学特設予科に入学したのです。夏衍さんはずっと私たちの入学手続きをすべてやってくれました。しかも私たちを学校の宿舎に案内して、落ち着き先を手配してから、ようやく奈良を離れて福岡電機大学に戻りました。」であるが、夏衍『日本日記（1925年）』によれば、「9月9日。午後3時、神戸到着。8時、大

阪の葉緒耕先生の家に行く。その晩、豊田館に投宿する。』<sup>26</sup>との記述がある。

午後3時神戸に到着後、すぐに奈良女子高等師範学校に行ったのではなく、神戸に上陸後まず大阪に行き、当日の晩は現在の箕面公園内にあった豊田館に投宿し、翌日9月10日午前大阪から汽車に乗って奈良に向かったことがわかる。

さらに銭青は、「すでに連絡を取っていた日本国立奈良女子大学特設予科に入学したのでした。夏衍はずっと私たちの入学手続きをすべてやってくれました。しかも私たちを学校の宿舍に案内して、落ち着き先を手配してから、ようやく奈良を離れて福岡電機大学に戻りました。」と述懐しているが、夏衍『日本日記（1925年）』ではその部分はどのように書かれているのか。以下を見てみよう。

「9月10日。大阪から汽車に乗り奈良に到着した時はすでに1時半。淑たちを伴って入校した後、すぐに汽車に乗り大阪に戻り、その日の夜8時に特別急行に乗り、帰校。」<sup>27</sup>

つまり、大阪で一泊した夏衍たちは翌10日、大阪から汽車に乗り、奈良に到着したのが午後1時半。その後、夏衍は蔡淑馨たちを伴って奈良女子高等師範学校に行き、入学手続き、入寮手続等の手伝いをした。その諸手続きが完了すると、夏衍はその足ですぐさま大阪にとって返し、午後8時大阪発の特別急行に乗車し、戸畑の明治専門学校に向かったということになる。

銭青が述懐する「福岡電機大学」は明らかに「明治専門学校」の記憶違いである。

また、「すでに連絡を取っていた日本国立奈良女子大学特設予科に入学したのでした。」という「日本国立奈良女子大学特設予科」は正式には「奈良女子高等師範学校特設予科」である。

銭青は「葉墨君校長は私たちのために浙江省教育庁に申請してくれました。当時、教育庁の秘書長は銭学森の父であり、且つ葉校長の同級生でした。おかげで留学手続きはとても順調に進み、あとは旅装を整えて出発を待つばかりでした。」と述懐している。夏衍『日本日記（1925年）』によれば、

「8月20日。午前、淑の所へ行き、葉墨君が彼女たちのためにやった奈良女子師範との交渉はすでに成功し、入学後に恐らく官費が得られるであろうとのことを知った。淑は大喜び。昼食後、共に留芳へ行き写真を撮る。その後、共に西湖に行き、三潭印月公園楊庄西冷印社で遊ぶ。」<sup>28</sup>

夏衍は8月20日午前に杭州で蔡淑馨に会ったときに、奈良女子高等師範学校特設予科への入学が許可されたという吉報を知ったのであろう。

## 夏衍と蔡淑馨

さて、夏衍の留学先である明治専門学校に夏衍が帰り着いた部分について、夏衍は『日本日記（1925年）』9月11日のところでつぎのように記述している。

「9月11日。淑に本3冊郵送。午前8時門司に到着。電車に乗り、宿舎に帰る。疲労困憊。」<sup>29</sup>

つまり、9月10日に蔡淑馨たちを奈良女子高等師範学校に送り届けた夏衍はすぐさま大阪にとって返し、当日午後8時大阪発の特急列車に乗り込み、翌9月11日午前8時に門司に到着し、九軌電車に乗り換え、戸畑の明治専門学校に帰ったということになる。

（この節のまとめ）

- 1）夏衍たちが上海を出発した日時に関する考察について、以下のようにまとめることができるであろう。

1925年8月15日に夏衍は蔡淑馨たち浙江省立杭州女子中学校の卒業生6人の女子学生を伴って、長崎丸に乗船して上海を出発したのではなく、同年9月7日に上海を出航したことが判明した。しかも本来予定ではその前日の9月6日に上海を出航する予定であったが、強風のため、上海丸が欠航となり、彼らはやむなく振華旅館に戻り、もう1泊したのであった。

- 2）今回夏衍が辿ったルートと日時について、以下のようにまとめることができるであろう。

上海→長崎→神戸→大阪→奈良→大阪→門司→戸畑。

9月7日、上海発。

9月8日、正午、長崎着。神戸行きの出航時間まで、長崎市の諏訪公園商品陳列館を参観。

9月8日、午後5時、長崎発。

9月9日、午後3時、神戸着。

9月9日、神戸から汽車で大阪に向かう。豊田館に宿泊。

9月10日、大阪を発ち、奈良着が午後1時半。すぐさま直接奈良女子高等師範学校に行き、諸手続きを行う。

9月10日、奈良から大阪に戻り、大阪午後8時発の特別列車に乗車。

9月11日、午前8時、門司着。九軌電車に乗り換え、戸畑の明治専門学校に向かう。

## 第5節 奈良女子高等師範学校と蔡淑馨たち浙江省立女子師範学校出身の留学生について

奈良女子高等師範学校はどのような学校なのか。周一川『近代中国女性日本留学史（1872～1945年）』を参考に以下まとめてみることにする。<sup>30</sup>

1908年創立の奈良女子高等師範学校は東京女子高等師範学校および蚕業講習所女子部とともに中国人女子留学生を受け入れた学校である。

奈良女子高等師範学校は1952年に奈良女子大学に改組されるまでの44年間に3千人以上の卒業生を世に送り出したが、その中には57名の中国人留学生が含まれている。

中国人留学生が初めて奈良女子高等師範学校に留学したのは1910年のことであった。清朝政府が1910年に「学部咨留日女生酌定補官費辦法札飭提学司遵照文」を公布し、合格した中国人女子学生に限り、補助が支給された年であった。

奈良女子高等師範学校の最初の留学生は5名の清国留学生で、聴講生という身分であった。一人は実践女学校の出身、他の4名は青山女学校の出身である。しかし翌1911年、辛亥革命が勃発したため、彼女たちは学業半ばで帰国する。その後、10数年間、中国人留学生が奈良女子高等師範学校に入学してくることはなく、1924年になり、ようやく2名の中国人留学生が入学した。2人とも私費留学生であった。そして翌1925年、浙江省立女子師範学校出身の蔡淑馨たち6名が奈良女子高等師範学校の特別予科に留学するのである。

1925年、奈良女子高等師範学校は「特別予科生徒募集」と「特別予科設置要領」を公布し、中国人留学生15名の募集を決定した。さらに同年、「特設予科規程」が制定された。第一条から第八条を以下簡単にまとめる。

第一条では、中華民国の女子の予備教育のために特設予科を設置すると、その設置目的を規程した。

第二条では、修業年限を1年と規程。

第三条では、授業時間を週30時間と規程。

第四条では、定員を15名と規程。

第五条では、高等女学校卒業者と同等以上の学力を有し、さらに日本語能力のある者という入学試験応募資格について規程。しかし、その規程の後段に但し書きがついている。それは、しかし場合によっては日本語会話能力が一定水準に達しないものであっても入学を許可することがある、と規程している。

蔡淑馨たち浙江省立女子師範学校の卒業生6人はこの規程の但し書きに救われたといえる。

第六条では、受験料について規定し、第七条では、修了書の授与について、第八条では年額50円の授業料について規程している。

周一川は『近代中国女性日本留学史（1872～1945年）』の中で、蔡淑馨ら6人の留学生の奈良女子高等師範学校特別予科入学後について、つぎのように述べている。

## 夏衍と蔡淑馨

「銭青ら6人は奈良女子高等師範学校の特設予科に入学後、高耐玉と蔡淑馨は中途退学した。2人は上京し、高は東京女子医学専門学校に、蔡は美術学校に進んだ。その他の4人は特設予科卒業後、奈良女子高等師範学校本科に進学し、浙江省教育局の官費留学生になった。銭青と程国馥は文科に、葉雅棣と陳楨は理科に進んだ。」<sup>31</sup>

「銭青とともに奈良女子高等師範学校に留学した5人の学生たちも、医学を勉強し、帰国後も医学の道に進んだ高耐玉を除く他の4人は銭青同様、生涯、教育に従事した。」<sup>32</sup>

### 第4章 来日に際しての夏衍と蔡淑馨の心情

夏衍『日本日記（1925年）』の中から、蔡淑馨の来日に際しての夏衍と彼女の心情をつぎに見ていくことにしよう。

1月10日。愛しの淑からの手紙を受け取る。

淑、来日の気持ち有り。私は彼女のために一生懸命お金を工面しなければならない。もし本年の公費が毎月支給されたら、彼女一人の一年間の費用は問題ない。さもないと、春休みに本を著してお金を工面しようと思うが、望みどおりになるかどうかわからない。

2月21日。淑からの手紙を受け取る。淑へ手紙を出す。

来日を要請するためにも、私は貯金に励まなくてはならない。

2月24日。愛しの淑からの手紙を受け取る。

私が今夏彼女とともに来日する計画がもし彼女の父に知られたら或いは面倒なことになるかもしれない。隠す必要がある。

3月7日。私の淑からの手紙を受け取る。

淑が来日の件はどうしても父親に相談しなければならないというので、私も同意した。また、もし来日できれば、高師の文科或いは教育科に入学する予定であるという。

4月4日。淑からの手紙を受け取る。

淑から2通の手紙。来日の件、彼女の父が杭州に来て慌ただしくしていたので、未だに相談していない。手紙でお願いするつもりだが、たぶん反対されないだろう云々と書いてあるので、一安心。

5月19日。淑からの手紙を受け取る。

淑から花びら4枚送られてきた。このため彼女への思いがさらに深まった。

貯蓄計画が半年強で失敗、せいぜい400元は貯めなければならない。

5月23日。愛しの淑からの手紙を受け取る。

淑の手紙で、彼女の父は彼女の来日のことについて「余不賛成」のわずか4文字で答えたという。もし来日すれば父娘の感情がぎくしゃくするであろう。またもし来日しなければ進学ของ 望みが絶たれてしまう。彼女はとても悩み、傷ついている。そのため私も暗澹たる気持ちである。世の中で一番悲しいのは母のない子——世の中の母の無い子は無理に笑って継母を喜ばせようとする。悲しいことだ。私は手紙を書いて彼女を慰めた。私は彼女が万難を排してここに来る勇気を持ってほしいと切に願う。

6月3日。愛しの淑からの手紙を受け取る。

淑から手紙。すでに来日決定。唯、彼女の父と意思の疎通を図りたい、仁孝果敢、感じ入る。手紙に、「私は命をあなたに捧げます」との言葉があり、感激に堪えない。

6月9日。愛しの淑からの手紙を受けとる。

昨晚一晩眠れず。いろいろな思いが沸き起こったが、やはり良策に苦しむ！

もしも結婚して、淑が彼女の冷酷な家を離れれば、さらに求学の主張を貫徹しなければならないだろう。もしそうなれば私は彼女を幸福にするし、また反対する必要もないだろう。しかし、今の世の中は金銭万能である。それなのに私は不愉快な負担を兄と兄嫁に加えることがどうしてできようか。恐らくこれは将来の永久なる苦痛となるであろう。

6月12日。愛しの淑からの手紙を受け取る。

淑の手紙に、来日に関して彼女の父の賛同は得られず、この重い負担を私一人に負わせるには忍びず、杭州で働くつもりだとのこと。私はこれを読んで涙する。

6月20日。淑からの手紙を受け取る。淑へ手紙を出す。

彼女の来日の気持ちは未だに少しも衰えていない。その勇気に非常に慰められた。彼女は私のためにこのように苦しみを受けたことに対して、私の心は苦しい。彼女がもしここに来ることができれば、私は彼女を幸福にするために努力することを誓う。

6月23日。淑からの手紙を受け取る。淑へ手紙を出す。

淑から手紙が2通来る。彼女の友人某君が彼女の家に行ったとき、継母が私たちのことを話した。この夏の結婚のことはなお進行中であると。頗る憂慮すべきことである。

7月19日。淑からの手紙を受け取る。

淑から来信；夏休み、依然、女子中学に留まる。彼女の友人たちはすでに杭州へ帰った。

8月1日

淑！

とうとうもうまもなく帰国だ。この1年渴望し、憧れ、ずっと思い続けてきた8月がやって来た。今晚、長崎へ行き、明日「上海丸」に乗船し帰国だ。私は今から一步一步我が愛する人に近づいていくのだ。

8月2日

午後1時出帆。途中風なし。

8月3日。淑へ手紙を出す。

午後3時、上海に着く。その晩、中国映画『上海一婦人』を観る。

8月4日

午後1時快速列車で杭州に戻る。7時ごろ家に到着。母、兄、兄嫁等には意表外だった。

8月5日。淑からの手紙を受け取る。

午後、西大街へ行き、淑を訪問。しばらくぶりの突然の再会。お互い見つめ合ったまま無言。彼女の日本行のこと、彼女の家および蔡宅から伝え聞くところでは彼女の父がこのことを許可した事実は不確か。私は明日許先生に調停役を頼み、それから（彼女の父に）話すつもりである。

8月6日。淑からの手紙2通受け取る。

友三と共に湖墅定光寺の許先生を訪問。淑の留学の件について、彼女は「純甫叔父が結婚後でなければこのことは許可できないとの立場を堅持しているので、私としては仲裁は難しい」云々。

8月7日。淑へ手紙2通出す。

小粉牆の淑を訪問、不在。

8月8日

午後、小粉牆の淑を訪問。淑未だに来ていない。陳君すでに彼女に会いに行った。すぐさま西大街に来る。長い間話をした。彼女は日本留学の件で、障碍が多く、頗る感傷的になっている。私は彼女を慰めた。しかし失言がもとで彼女は涙を流す。私は暗澹たる気持ち。6時、いっしょに陳石民君を訪問し、いっしょに西湖で遊ぶ。9時引き返す。私は淑を学校まで送る。別れ際、私は思わず彼女にキスをした。これは私と淑の初めてのキスである。

8月11日。淑から手紙を受け取る。

3時ごろ淑を訪問。彼女は入浴しようとしていたが、すぐさまやって来て、友三のところでちょっと座ったが、話が長くなり、6時に分かれる。

8月14日。淑へ手紙出す。

午前、城内に入る。午後、听濤のところへ行く。少し話した後、淑のところへ行く。彼女が言うには、万やむを得ないときは、父の主張を聞きいれるしかない云々と。ただ、私は家の中の状況を察するに、今年中に結婚式をあげれば、恐らくこのことの協議は間に合わないであろうと思うから、私が直接彼女の父に話をするに決めた。

8月15日。翰周、伯父に手紙を出す。



8 時頃、淑の所へ行き、しばらく話をし、共に昼ごはんを食べた後、午後4時李宅へ行く。

8 月18日

淑からの手紙を受け取り、城内に行ったが、彼女の父の手紙がまだ来ていないことを知った。自宅で晩御飯を食べた後、後市街へ行く。

ロマンチック！この日、2 回目のキス。

8 月19日

早朝、淑の所へ行く。10時ごろ淑初めて来る。彼女の父の手紙は厳しい語句の手紙だった。「もうこれ以上やって来てあれこれ弁解する必要はないと端軒には伝えてある」のようなことばであった。私の手紙は日頃から非常に丁寧な手紙であるのに、このような結果で、頗る不愉快である。淑、憔悴。

8 月20日

午前、淑の所へ行き、葉墨君が彼女たちのためにやった奈良女子師範との交渉はすでに成功し、入学後に恐らく官費が得られるであろうことを知り、淑は大喜び。昼食後、共に留芳へ行き写真を撮る。その後、共に西湖に行き、三潭印月公園楊庄西冷印社で遊ぶ。

8 月23日

早朝 5 時、新登からかごに乗り、富陽へ行き、富陽から新振興号に乗り杭州に帰る。

長兄等伯父たちは手紙で許先生に今年は結局婚儀を執り行うのかどうかたずねた。私を探したが見つからず、のちに陳君の所で私が新登にいと知る。旧環境の中では、このことはまるで大逆不道徳な者と見なされた。可笑しくもあり、哀れむべきことでもある。これに勝ることは無い。

8 月24日。堅如へ手紙を出す。

彼女との今回の旅行はべつにたいしたことではないのに、まるで許すこのできない大きな罪を犯したとでもいうように大騒ぎをしている。

他のものとはやかく言うべきではない。昕濤は老人ではないのに、中国に帰国して2年も経たないのに、私の今回の件について彼は兄に「端軒は今回大きな過ちを犯した、したがって、純甫はますます彼等を一緒に行かせないであろう！」と言った。実に私の心は凍りついた。昕濤は以前私をよく助けてくれて、私は彼のことを知己と思っていたのに、今回は大いに驚いた！彼は今年はただひたすら私たちの行動を偵察し、とりとめのない話をした。いい青年が中国に帰国して2年でこのように一変してしまうとは、悲しいことだ！2、3年後の私はどのようなになっているのだろう。どのように。

8 月29日

今日は兄嫁の29歳の誕生日。蔡宅親族みな城外に来る。淑は手紙を持って城内に入る。淑は

## 夏衍と蔡淑馨

彼女の父に手紙を出す。今後はもうあなたと話をしたくないと。

8月30日

午前、城内に行く途中雨に遭う。ちょうど堅如が尋ねて来て、同乗して城内に入る。淑のところへ行き、昼食後、紀成と共に葉宅に行き、墨先生とかなりの時間話し合う。5時ごろ、淑、銭（青）、陳（稹）らがやってくる。その晩、亦品香で友三、堅如らと共に夕食をとる。

9月1日。淑へ手紙を出す。

午後、銭青から手紙がきて、4時ごろ城内で陳稹に会おうと招待される。上海丸のチケットを頼む。

9月2日淑へ手紙を出す。淑からの手紙を受け取る。

程国馥すでに杭州に来ており、同行の予定。

9月3日

朝一番の列車で上海へ行く。

9月4日。長兄へ手紙を出す。

12時、駅に着き、淑らを迎える。

同行者は淑の他に、陳之麟、楊緑湘、高耐玉、魏××女士の4人。

蔡紹敦の招待で、大西洋で夕食、映画『花好月円』を観る。

淑、家に帰る。

9月5日

淑の日本留学の件、未だに彼女の父の許可を得ず。

9月6日

強風。

上海丸出航不能。やむを得ず振華旅館に戻る。

9月7日

午前8時半出航。午後風波大きい。私は激しく吐く。只、淑、国馥、魏らは頗る元気。

9月8日

正午、長崎到着。私は国馥と淑と共に諏訪公園商品陳列館に遊ぶ。午後5時出航。

9月9日

午後3時、神戸到着。8時、大阪の葉緒耕先生の家へ行く。その晩、豊田館（箕面公園）に投宿。

9月10日

大阪から汽車に乗り、奈良に着いたときはすでに1時半。淑たちを伴って学校に行き、そのあとすぐ、汽車に乗って大阪に戻り、当日晩8時の特別急行に乗り学校に戻る。

9月11日。淑へ本を3冊郵送。

午前8時門司到着。電車に乗り宿舎に帰る。疲労困憊。

9月21日。淑からの手紙を受け取る。

淑から今日手紙が来て、すべて順調と知り、非常に安心した。

9月29日。淑に手紙を出す。

日本語会話カード30数枚作って、淑に送った。

10月1日。淑、維伯へ手紙を出す。

淑へ手紙を出す。そして彼女の冬服代として日本円で50元同封した。

10月5日。淑、長兄に手紙を出す。長兄からの手紙を受け取る。

長兄の手紙に曰く；母が私を心配して病気になる、近頃では日増しに病状が重くなった。万が一のとき、私は兄・兄嫁に対していやなことをいうことはできない。私は母の病気が非常に心配である。すぐに駆けつけられないことが恨めしい。兄は私を罵った。兄の怒りの下で、私は何も弁解できない。私は、「罪は自分ひとりにある。」という8字で自分を責めた。私は兄・兄嫁と仲たがいがいたくない。彼等がやりたいようにやればいい。ただ、恥ずべきことはなにもしていない。私一人がみんなの非難の的になるのは当然私の責任なのだ。私は思う；「もし私が死ねば多くの問題は解決するかもしれない。私が生きていれば母を安心させられない、さらに兄・兄嫁に累を及ぼす。淑にも累が及ぶ——淑はもし私がいなければ、彼女の父は彼女の日本留学に反対することはなかったであろう。彼女もまたこのように孤独になることもなかったであろう。だからとても自殺したい！自殺だ！自殺、大欲を超越した自殺、勇気が無くてどうする？

10月14日。淑、兄嫁からの手紙を受け取る。淑、兄嫁へ手紙を出す。

淑からの手紙に曰く；「悔恨ここに至れり」。私は彼女に、このように悲観する必要はない、と返信する。

10月19日。淑へ手紙を出す。

淑から手紙；尋常大学読本一冊が同封。漢字に注音をつけて欲しいとのこと。

10月20日。淑へ手紙を出す。本を同封。

10月24日。淑からの手紙を受け取る。

淑から写真2枚送って寄こす。1枚は彼女の学校の中国人同級生が双十節のためにとった写真、もう1枚はルームメイトとの写真。

11月4日。淑に手紙を出す。長兄に手紙を出す。朝鮮人参を同封。

淑からまたしばらく手紙が来ない。この前の手紙では風邪を引いたとあった。もう治っただろうか。ひたすら念じる。昨晚、手紙を1通書いた。今日彼女から手紙が来たら一緒に彼女に

## 夏衍と蔡淑馨

送ろうと思って。しかし午前、午後ともに失望。私は自暴自棄に陥りそうである。

11月8日

淑からの手紙で、風邪はすでに治ったとのこと、安心、安心！

愛しの淑からの手紙で、沈経理員へ手紙を出し、そして手紙を受け取ったとのこと。

「私のあなたに対する態度が変わったとでもいうの？お兄さん、あなたはなぜそんなことを考えるの？私たちが日本に来るときの船の上のあの夜のことをまだ覚えている？私はずっとあなたを愛している、あなたも私と同じであってほしいと思う。

11月29日。淑からの手紙を受け取る。

以前中国文を淑が日本語に翻訳したものを今日郵送してきた。間違いは些かあるものの、しかし、彼女はまだ来日3ヶ月、そんなにいい成績がとれるはずもない、褒めてやるべきである。2ヶ月間の努力の跡が容易に彷彿とさせる。

12月24日

今日、森祐吉先生が留学生を招待。私は会議の席上、排日の「定義」とわれわれの態度を説明した。11時半散会、下宿に帰ると淑から「早く来て！」の電報を受け取る。私は淑が病気になったと思い、涙が流れた！すぐに駅に行ったが、もう終電はなくなっており、帰るよりしかたなかった。考えれば考えるほど心配で、一晩中一睡もできなかった。友三も心配してくれた。私は思った、第1に彼女が病気である、第2に彼女の父になにかあったのだ、と。

12月25日

午前8時24分戸畑発、晩11時半大阪着。自動車に乗り上本町6丁目へ行き、奈良行きの電車に乗る。12時半奈良に到着。私は飛ぶように彼女の学校に行った。守衛の話によれば、彼女は何事も無く、元気だという。そして私に明日行くようにと言った。これでようやく安心した。まったく一幕の喜劇だ。その晩、中村座に宿泊した。

12月26日。淑から手紙（2通）を受け取る。

8時に女子師範に行く。淑が元気なのを見て、安心する。彼女が電報を打った原因は、彼女の99号の手紙の中に書いてあるので、ここでは記さない。

以上、夏衍の『日本日記（1925年）』の中から、主に蔡淑馨の来日に関する部分を中心に抜粋してみた。<sup>33</sup>

蔡淑馨の留学について、これまで言われてきたような通説——蔡淑馨の父は娘の日本留学を快諾し、むしろ夏衍たちを応援し、そのうえ多額の留学費用を快く出資した——は、この夏衍『日本日記（1925年）』を読む限り、そのような事実はないことが判明した。逆に蔡淑馨の父は娘の留学に反対こそすれ、快諾はしていない。『日本日記（1925年）』を読む限りにおいては、

蔡淑馨は家出同然で日本に留学したことがわかるのである。

さて、最後に、この章のまとめとして、蔡淑馨の来日に関して知り得たことを再度以下で確認することにしたい。

- (1) 1月10日に受け取った蔡淑馨の手紙に、来日の気持ちが初めて書かれていたこと。
- (2) 2月21日の夏衍が蔡淑馨に出した手紙に、彼女の日本留学への決意を要請したこと。
- (3) 2月24日時点では来日の計画が彼女の父にはまだ隠そうとしていたこと。
- (4) 3月7日の蔡淑馨の手紙では、彼女が来日の件は父親に相談したいというので、夏衍が同意したこと。また、奈良女高師の文科或いは教育科を希望していること。
- (5) 5月23日時点の淑の手紙で、彼女の父は彼女の来日について「余不賛成」であること。
- (6) 6月12日の手紙では、蔡淑馨の来日について、依然彼女の父の賛成は得られていない。
- (7) 6月20日の手紙では、蔡淑馨の来日の気持ちは衰えていない。
- (8) 6月23日の淑の手紙では、継母が、夏衍と蔡淑馨の結婚は進行中であって、決定ではないと、蔡淑馨の友人に語り、夏衍は心配していること。
- (9) 8月6日、夏衍に日本留学を勧めてくれた許先生に蔡淑馨の父と夏衍・蔡淑馨の間に入っての調停役を依頼するも、断られたこと。
- (10) 8月14日の時点では、蔡淑馨は、結婚が先だとの父の主張を聞き入れようかと気持ちが揺れるが、夏衍自ら直談判するというにしたこと。
- (11) 8月19日、しかし、蔡淑馨の父から、会って夏衍の釈明など聞く必要はないとの厳しい内容の手紙を受け取り、夏衍と蔡淑馨は憔悴したこと。
- (12) 8月20日、奈良女子師範への入学決定の知らせを受け取ったこと。
- (13) 8月29日、蔡淑馨は、今後はもうあなたと話をしたくないという内容の手紙を父に出し、父との決別を決心したこと。
- (14) 9月5日の時点でも蔡淑馨の日本留学の件、彼女の父の許可を得られていないこと。
- (15) 9月7日、蔡淑馨は父の許可を得られないまま、上海を出発し日本へ向かったこと。

#### 最後に 夏衍『致錢青』

最後に、夏衍夫妻の長年の友人である錢青に夏衍自らがしたための手紙『致錢青』<sup>34</sup>を訳出・紹介してみることにする。

錢青同志：

約60年ぶりに、突然あなたからの手紙を受け取りました。まことに隔世の感があります。淑

## 夏衍と蔡淑馨

馨は1984年10月に亡くなりました。80歳でした。彼女は、「文革」の影響で、82年以降、精神状態に異常をきたし、幻聴や幻覚に襲われました。亡くなる前には植物人間になってしまったので、何の苦痛もなく臨終を迎えました。私は1955年に上海から北京に転勤になり、早いものですでに30数年経ちました。近況を知ることができて、とても慰められました。どうかくれぐれも健康に留意されますように、そして御一家の皆様のご健康をお祈り致します。

夏衍 11、20 (1989)

### (注)

- 1 夏衍著『懶尋旧夢録』。阿部幸夫訳『日本回憶 夏衍自伝』P125~126。東方書店 1987年3月。
- 2 P132。注1と同じ。
- 3 夏衍『聖誕之夜』P17。袁鷹、姜徳明編『夏衍全集⑨ 文学(下)』所収。浙江文芸出版社 2005年12月
- 4 P128。注1と同じ。
- 5 夏衍『船上』P3~5。注3と同じ。
- 6 夏衍『船上』P6~7。注3と同じ。
- 7 この作品を1920年に夏衍が留学目的で初めて来日したときのこととして使用し、紹介している論文が散見される。しかし、この『船上』は1923年1月15日脱稿の作品である。しかも、この作品の書き出しに、「这一天是1922年9月1日。」と書かれている以上、この作品を1920年の夏衍の初来日時のものとして紹介することは、文字通り読めば、不可能であろう。
- 8 <http://zh.wikipedia.org/wiki/>
- 9 陳堅、陳抗共著『夏衍伝』P63~P66。北京十月文芸出版社 1998年8月
- 10 『日本日記(1925年)』P215~216。沈寧、沈旦華、沈芸編『夏衍全集⑩』所収。浙江文芸出版社 2005年12月
- 11 陳堅・陳抗氏は『夏衍伝』(P64)の中では「符竹因」とする。
- 12 P65。注9と同じ。
- 13 『新月之下』P8~11。注3と同じ。
- 14 「N海岸」とは中原(なかばる)海岸である。かつて、明治専門学校の正門前には松並木と白浜の海岸があり、1922年には中原海水浴場が開設されたが、昭和初期から順次埋め立てが始まり、中原海岸は現在残っていない。
- 15 夏衍『聖誕之夜』P16~19。注3と同じ。
- 16 小倉市。現小倉北区香春町の小倉カトリック教会かと思われる。  
[http://www.pauline.or.jp/visitingchurches/200811\\_kokura.php](http://www.pauline.or.jp/visitingchurches/200811_kokura.php)
- 17 「F県」とは福岡県のこと。

- 18 「T市」とは戸畑市のこと。
- 19 周一川著『近代中国女性日本留学史（1872～1945年）』P114～116。社会科学文献出版社 2007年6月
- 20 『文匯報』1995年4月11日、第7面
- 21 夏衍『日本日記（1925年）』P238～P239。注10と同じ。
- 22 P237。注10と同じ。
- 23 P239～P240。注10と同じ。
- 24 P240。注10と同じ。
- 25 正式名称は「長崎商品陳列場」といい、1897年に諏訪公園入口横に建設され、長崎県内の主要物産の陳列紹介を行った。
- 26 P240。注10と同じ。
- 27 P240。注10と同じ。
- 28 P238。注10と同じ。
- 29 P240。注10と同じ。
- 30 P100～116。注19と同じ。
- 31 P102。注19と同じ。
- 32 P116。注19と同じ。
- 33 P210、214～215、217、221、227、229～231、234～246、249、251。注10と同じ。
- 34 P172。注10と同じ。